埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

保育者をめざす学生は祖父母からどのような影響をうけているのか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): The students in a kindergarten teacher and child care worker training course, Grandparents, Relationships 作成者: 加藤, 邦子, KATO, Kuniko メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1286

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

保育者をめざす学生は祖父母からどのような影響をうけているのか

加　藤　邦　子

問題と目的

福伊（2016）は，現代の学生には実体験が乏しいため，「生活者」「ケアする者」「教育する者」としての体験に関するカリキュラムが必要になっていると述べている。養成課程の学生を対象とした教育実習の前後の調査（齊藤他，2007）では，ストレスとコーピングとの関連を明らかにしている。実習中の心理的ストレスに対して，嫌悪の程度を弱め，問題を解決するために行う認知的・行動的試み，すなわちコーピングの内容が，学生の不安感や思考力低下などのストレス反応に大きく影響したと述べている。加えて，積極的に実習に取り組みながらも具体的な問題解決と情動調整をねらいとする複数の解決方法を組み合わせて用いることができる学生は，そのような対処を行わない学生よりストレス反応を抑えることができること，対人状況において感情を調整するスキルやストレスを処理するスキルなど，いわゆる社会的スキルが高いほど，ストレス反応が低かったとしている。保育者は，子どもの命を預かる責任の重い業務を担うため，ストレスを抱える状況でどのような対処を行うことができるかを検討する事には意義がある。

養成校で資格・免許を取得した後，保育現場に就職を希望すれば，ほとんどの学生は保育者として勤務することが可能であるが，離職率は高く，相対的に就労継続が短いこと，潜在保育士が多いことが指摘されている。離職した後に求職するとしても，保育士として勤務することを希望しない層が存在する。たとえば，平成 25 年社会福祉施設等調査（厚生労働省統計情報部）によれば，保育所保育士全体の離職率は 10.3％で，公営保育所 7.1％ , 私営保育所 12.0％となっている。

平成 25 年の「保育を支える保育士の確保に向けた総合的取組」（雇用均等・児童家庭局・職業安定局，2013）の公表によれば，「保育士資格を有しながら保育士としての就職を希望しない求職者」のうち，1 年未満に離職した者が 10％，1 年以上 3 年未満は 20.2％，3 年以上 5 年未満は 20.5％，5 年以上 10 年未満は 30.7％となっている。地方自治体では新人保育士を対象として，離職防止のために，就職前の期待と現実とのギャップへの対応方法，保護者対応等の業務について

の研修を実施するなどの対策をとってきた。しかしながら，平成 29 年雇用動向調査結果によると教育・学習支援業の離職率 16.6%，医療・福祉業では 15.5%で相変わらず離職率は高いことが報告されている（厚生労働省，2018）。離職の理由として「給与・賞与等の低さ」「人員の不足」，賃金・休業・勤務時間等の勤務形態が影響していると考えられるが（厚生労働省，2014），保育者という仕事の責任の重さもその一因であろう。

このような保育者の責任の重さの背景には，現場で求められる保育者の資質が多岐にわたることがある。たとえば須永（2010）は，保護者が親として機能するようになったプロセスについて，保育者とのやりとりをとりあげ，エピソード分析を行った結果，保護者は保育者との関係性が深まるに従って，子育てに必要とされる知識や技術，子どもへの対応の仕方を身につけていくことができたと解釈している。すなわち，保育の場では，保護者に代わって乳幼児を保育する―という業務だけでなく，保護者と「ともに」子どもを育てるという姿勢を示すことが求められる。保護者のありのままを受けとめ，「子育て」の世界に受け入れようとする姿勢を一貫して示す必要がある。そのためには，保育者自身が豊かな生活体験を重ね，地域の様々な人と関わり，対人状況において不安を抱くことなく，柔軟に対応できる資質が必要なのであろう。

中嶋・後藤（2008）は，アイデンティティの基礎となる基本的信頼感や自律性が未発達であると，養育者になることへの負担や不安を感じることを明らかにしている。したがって，保育者養成課程で学ぶ学生についても，保育現場を体験する実習に際し，負担感や不安を抱く傾向がみられるのは当然と考えられる。

藤尾他（2010）は幼稚園が求める保育者の資質を調査し，現場の教員，保護者，園長の各視点から次のような結果を示している。三者が等しく重視していた資質は，「子どもの行動を受容し，認める態度をもつ」「適切な心情理解と遊び・生活の援助」「心身が健康である」「保育への熱意，積極性」「的確な判断力と臨機応変な行動力」であった。 教員と保護者の二者が等しく重視した項目として，「子どもが好きである」「笑顔がある」等人間性にかかわるものであった。一方で幼稚園の現場が求める保育者の資質は，「子どもに対する信頼と責任感」，「組織の一員としての自覚・責任感・協働性」であった。採用後 3～4 年後に現場が求める資質は，前述の能力に加え，「危機管理能力」「保育現場でのコミュニケーション能力，提案力」「自己省察力」であった。したがって幼稚園で保護者から求められる資質と現場の教員や園長から求められる資質には，大きな違いがあることが窺える。さらに山脇（2017）は，幼稚園教諭を対象として，教諭組織の実態と個人の所属感との関連を検討したところ，教諭の組織のあり方が個人の就労意欲や職場における人間関係に影響していると述べている。すなわち一人ひとりの教諭にとっては，保護者あるいは，現場から求められる資質は異なっており，満足感や安心感を得ることが難しく，そのために仕事に対する意欲が低迷し，離職につながることも懸念される。

一方，Shonkoff & Phillips（2000）は，未就学期にある子どもが就学までに身につけたい力は，感情調整，社会性の発達であり，興味関心・自己の意思・学習状況を自ら促すことができること，仲間と一緒に調整し，問題を解決すること，安心と自信をともなった前向きの動機づけを体験できること，という3つをリソースとして具体的に挙げている。子どもにこのような力を育むためには，教育・保育現場の保育者は，多様な側面から子どもの姿を捉え，乳幼児の人間関係にかかわる感情発達，すなわち個人的な体験に根差した社会情緒的発達や，対人関係を支える資質が求められる。

しかしながら少子高齢社会において，現代の大学生は家庭の小規模化が進み，きょうだいも少なく，親子関係を除く親密な関係といえば，学校を中心とした狭い同質的集団内での友人関係，仲間関係である。保育者をめざして進学したものの，勉学や実習に追われる中，人生や進路について思い悩む時期にあたる。自己確信が得られにくくアイデンティティがゆらぐこともあろう。現大学1年生は2000年に生まれている。牧野（2016）は，保育者養成校の短大・大学生と経済学部の学生に，「高校時代までに子育てや子どもについて学んだか，保育現場で職業体験等あったか」を尋ねたところ，経済学部の大学生は約40%，保育者養成校の大学生は97%，短大生は80%以上がECEC（Early Childhood Education and Care）に関する学習や体験があることがわかった。その結果から，ECECの経験が，その後のキャリアプランを動機づけたと結論づけている。入学前の体験は，進路の決め手のひとつになると考えられる。

本研究では，保育者養成課程に学ぶ学生が入学までに育んできた人間関係のうち，同居・別居にかかわらず祖父母との関係性とその影響に注目する。

祖父母の子育てへの協力に関する調査結果について，第7回21世紀出生児縦断調査（2009）では，親の用事がある時，親が病気などの時，食事，風呂，遊びの世話には祖父母の援助を得ている。いずれの家庭においても子どもの世話については，祖父母から30%を超える援助を受け，家事，生活費など援助は多岐にわたる。労働政策研究所（2012）による子どものいる世帯への祖父母からの援助の調査では，父子家庭，母子家庭のみならず，両親そろっている家庭においても，祖父母から子どもの世話援助を受ける頻度が「月2回以上」と答えた世帯は30%を超えており，祖父母から家事援助を受ける頻度が「月2回以上」という世帯も，父子家庭で43%，母子家庭で30%，両親そろった家庭で18%，と高い割合を占めている。祖父母は，孫の出産から，娘，息子，孫と新たな関係を築くことを経て，孫が成人期に至るまで重要な支援者となっている。したがって子どもにとっての「祖父母」は，親が妊娠期以降に頼る子育ち・子育て支援の担い手であると考えられる。

祖母の子育ち・子育てへの援助について，加藤（2014）は，地域子育て支援施設を利用している未就学児をもつ母親を対象とした調査を実施した。最も子育てを手助けしてくれる配偶者以外

の人について尋ねたところ，「祖母」（孫からみた続き柄）を挙げた人が多く，その平均年齢は61歳であったが，年齢には幅があった。祖父母が娘・息子世帯の近くに住んでいる場合，頻繁に子育ち・子育てを援助し，娘・息子・孫から頼られる存在として機能するものと考えられる。

そこで本研究では，今後保育の担い手となる保育者養成課程で学ぶ学生について，祖父母世代による被養育体験，成人するまでの高齢期の人とのかかわりの有無も，キャリア選択やコーピングに影響を与えるのではないかと考え，祖父母との関係や祖父母からの影響を明らかにすることとした。また，これまでどのような関係を築いてきたのか，それが進路選択に関連したかどうかについて明らかにすることを目的とする。具体的には，保育者養成校で学ぶ学生に対する祖父母の影響について，「未就学時期の祖父母による援助及び共行動の頻度」や「伝承」が，現在の祖父母との関係の認識に関連するのかを明らかにする。孫世代の学生からみた祖父母との関係についての認知とコミュニケーション頻度との関連について，実証的に検討する

方　法

調査対象：保育者養成課程のA短大1・2年，B短大2年，C大学2年に在籍する18歳～20歳337名の学生に質問紙調査を実施した。調査協力については，任意であること，無記名で協力を要請した。分析対象は，337名のうち，祖父母いずれかが生存し，現在の祖父母との関係の認識すべてに回答した女子学生286名（18歳15.4%，19歳54.9%，20歳29.7%）で，分析対象の平均年齢は，19.1歳（SD=.66）。有効回答：84.9%。

質問紙調査実施：2017年7月～2018年1月

父方・母方の祖父母いずれかと同居か隣居の学生は69名（24%），母方祖母宅と電車・車で1時間以上の距離に住んでいる学生は98名（34%）であった。

質問項目：⑴　祖父母との関係に関する認知16項目（GSNI, Strom et al., 1993; 1994）

⑵　祖父母とのコミュニケーション頻度に関する13項目

⑶　小学校に上がるまでに祖父母と関わった経験頻度

⑷　祖父母から受けた影響（自由記述　open end）

結　果

就学前に祖父母の養育をどの程度体験したのかについて女子学生286名に尋ねた結果（図1），共に食事をした，遊んだ，外出したという項目について，6割以上が「よくあった」と回答していた。また身の回りの世話をしてもらった経験も6割を超える学生が「よくあった」と答えてい

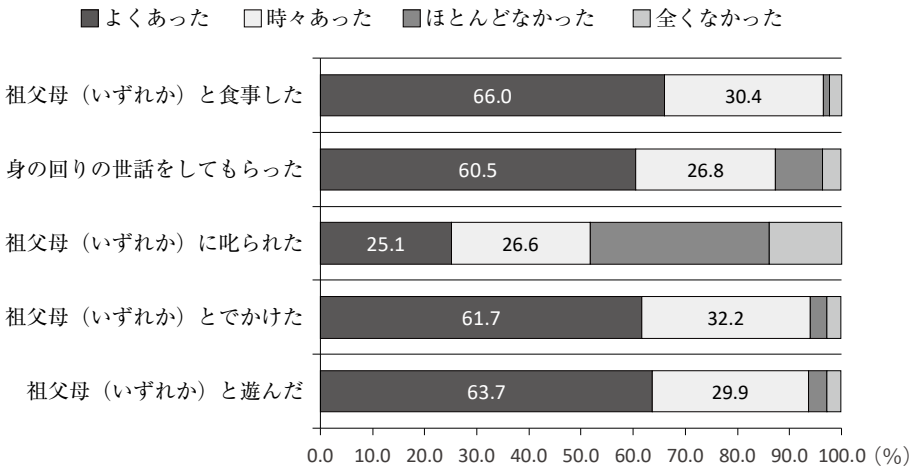

図 1　就学前に祖父母からしてもらったことの頻度

表 1　祖父母との関係認知の因子分析結果（主因子法によるバリマックス回転後）

項　　目	関係満足感	負担感	忌避感	共通性
祖父母と一緒にすごすことは楽しいと思う	**0.72**	−0.34	−0.20	0.62
祖父母と接して人間的に成長したと思う	**0.69**	−0.15	0.21	0.47
祖父母が楽しむことに合わせて，一緒に過ごしたり楽しむことができる	**0.67**	−0.28	−0.11	0.53
祖父母とかかわっている時の自分が好き	**0.65**	−0.22	−0.02	0.44
祖父母との接し方が，上手だと思う	**0.57**	−0.01	0.01	0.31
自分は祖父母に好かれていると思う	**0.56**	0.09	−0.32	0.35
祖父母との関係に満足している	**0.53**	−0.23	−0.17	0.38
祖父母と接することで，学校生活や家庭生活に張り合いができる	**0.44**	−0.13	0.24	0.28
祖父母はほしい物があると買ってくれる	**0.37**	0.20	−0.01	0.21
祖父母に自分の時間が束縛されるのがいやだ	−0.11	**0.72**	0.15	0.40
祖父母に何度も同じことを言われると，腹立たしくなる	−0.18	**0.64**	0.19	0.41
祖父母に接することが，負担に感じられる	−0.32	**0.52**	0.31	0.42
昔の話が多く，今の時代では無理な要求が多い	−0.02	**0.46**	0.35	0.29
祖父母と接していると社会から取り残されているように思う	−0.06	0.14	**0.68**	0.33
祖父母とのことで父母によく叱られる	0.05	0.19	**0.56**	0.29
祖父母に気に入られるように，我慢ばかりしていると思う	−0.06	0.23	**0.52**	0.31
因子寄与	**4.71**	**2.44**	**1.32**	**8.47**
寄与率（%）	**20.51**	**11.89**	**9.93**	**42.33**

た。尚，対象となった祖父母との続き柄は，母方の祖父母が約7割，父方の祖父母は約3割であった。

表1は，祖父母との関係を現在どのように捉えているのか，Strom 他による Grandparent Strength Needs Inventory（Strom et al.，1993; 1994）を参考に16項目の関係認知について尋ね，主因子法による因子分析を行い，バリマックス回転後の結果である。現在の関係認知は，「関係満足感」「負担感」「忌避感」の3因子で捉えることができた。それぞれのα係数は高く，関係満足感因子は寄与率20.5%，負担感因子は11.9%，忌避感因子は9.9%であった。

関係の認知の「関係満足感」「負担感」「忌避感」は，祖父母と学生の居住状況（父方母方祖父母いずれかとの同居・隣居・別居）とは有意な相関はみられなかった。孫から見た祖父母との関係の認知については，関係満足感という肯定的な側面と負担感・忌避感という否定的側面があり，祖父母との関係を肯定的にとらえる一方で，両価性をもつ関係性であることが示唆される。

次に「関係満足感」因子を被説明変数として，規定する要因について就学前に祖父母と関わった頻度，叱られた頻度，母方祖母の年齢・就業の有無，直接会って話をする頻度，スマホや電話で話をする頻度，メール頻度，父母それぞれと会話する頻度，家族と朝食・夕食をとる頻度などを説明変数とする重回帰分析を実施し，結果を表2に示した。就学前に祖父母と関わった頻度（図1の食事・世話・出かけた・遊んだの項目の合成得点を求めた）が高いほど，現在の関係満

表2　現在の祖父母との関係満足度を規定する要因分析
第1因子「関係満足感」を被説明変数とする重回帰分析結果

説明変数	β	t 値	p
母方祖母の年齢（歳）	0.13	1.71	+
母方祖母仕事の有無（1：有職，2：無職）	−0.03	−0.37	N.S.
母方祖母に直接会う頻度	−0.04	−0.34	N.S.
母方祖母と電話・スマホで話す頻度	−0.23	−2.85	**
母方祖母とメールをする頻度	−0.01	−0.08	N.S.
家族と一緒に朝食をとる頻度	−0.02	−0.32	N.S.
家族と一緒に夕食をとる頻度	−0.07	−0.88	N.S.
母親と会話する頻度	0.03	0.32	N.S.
父親と会話する頻度	0.23	2.78	**
未就学時期祖父母と関わった経験頻度	0.40	5.38	***
未就学時期祖父母に叱られた頻度	0.02	0.19	N.S.
R^2	0.31	***	
Adj. R^2	0.25	***	
N	286		

注）β：標準偏回帰係数
p <.001 ***　p <.01 **　p <.05 *　p <.10 +

足感が高く，過去の被養育体験が現在の祖父母との関係認知に影響を及ぼしていることが示唆された。父親と現在会話する頻度が高いと回答するほど関係満足感が高かった。孫が直接祖父母との関係を築いている―というわけではなく，親世代との重層的関係が示唆される。母方祖母とスマホ・電話で会話する頻度が多いほど，関係満足感は低くなるという結果を示したことから，学生は適度な距離を保ちつつ，関係を調整していることも推測される。

小川（1993）は，孫と祖父母世代の関係は，孫の年齢・学年などライフステージによって異なるとしているが，就学前に祖父母にしてもらったことは，現在の祖父母との関係満足度に何らかの影響を及ぼしていることが窺えた。Matthews & Sprey（1985）の研究によると，大学生 132 人に質問紙調査を行った結果，子どもの頃祖父母と良好な関係だった学生は，現在も良好な関係を維持しているとしているが，本研究の結果では，過去の祖父母からしてもらったことが，現在の関係に影響を与えていると推測される。

次に，祖父母から受けた影響について，学生の自由記述の回答内容をもとに分類を試みた。その結果，あやとり，お手玉など「祖父母により提供された体験」，社会のルール，食べ物を粗末にしないことなど「祖父母から教わったこと」，保育士になることを応援してくれた等「祖父母による進路（保育者への道）への動機づけ」，祖父母が優しくしてくれた，母とは違う安心感がある等「祖父母の頼もしさ・安心感・甘え」，落ち着いた話し方を教えてもらった等「祖父母との交流による質的側面」，体調管理をしてくれた，世話をしてくれた等「祖父母による世話」，以上 6 つに分類された。一方，これらの伝承の記述の有無は，現在の関係の認知との間に，有意な相関を示さなかった。「祖父母（いずれか）と遊んだ」の頻度が多いほど，伝承の記述があったが，相関は $r = 0.11$（$p \leq 0.10$）で有意傾向を示したにすぎない。

表 3　保育者養成課程に学ぶ学生が祖父母から伝承したこと（自由回答）

カテゴリー	自由回答の内容
祖父母により提供された体験（46 人）	あんたがたどこさとか，あやとりを教わった（18 歳），お手玉，おはじき，だるま落とし（18 歳），福笑いやかるたを教えてくれた，長縄，縄跳び，ジャンピングホップ，セミ取り（19 歳），花札，麻雀，トランプ，こま，竹馬，犬の飼い方など（19 歳），草でふねを折る折り方を教えてもらった（19 歳），農作業の楽しさ（19 歳），牧場とか道の駅とか祖父母だから連れて行ってくれるところや経験をさせてくれた（20 歳），子守歌，竹とんぼ，石けり，竹馬，金魚の飼育など教わった（20 歳），カッターで鉛筆を削ることを教えてくれた（20 歳）など。
祖父母から教わったこと（22 人）	社会のルールについて教わった（18 歳），食べ物を粗末にしないこと（19 歳），あきらめないことが大事，挫けそうなときでも祖父母はあきらめさせる言い方はしなかった（18 歳），優しくするばかりでなく，叱ることも大切なことを教えてくれた（18 歳），何事も早めに行動すること（19 歳），乳幼児に温かい心をもって接する事を教えてくれた（19 歳），常識のある行動をすることを教えてくれた（19 歳），人を大切にすること，ご飯が食べられることに感謝することを教えてもらった（19 歳），目上の人と関わるうえでの礼儀を教えてもらった（19 歳）

祖父母による進路（保育者への道）への動機づけ（22 人）	祖母が家で塾をしていて子どもと関わりたいと思うきっかけになった（19 歳），保育士になりたい夢を応援してくれて短大に通わせてくれた（19 歳），進路を決める時に反対をせず応援してくれた（19 歳），いとこの面倒をよく見ているので保育者になるよう勧められた（19 歳），祖母が先生だった（20 歳），おばあちゃんも幼稚園の先生だった（20 歳），祖母の影響で介護福祉士を取ろうと思っている（20 歳），あなたに向いている職業だといわれた（20 歳），好きなことを仕事にするよう言われた（19 歳）
祖父母の頼もしさ・安心感・甘え（15 人）	とても頼りになる（18 歳），小さいころからかわいがってくれた（18 歳），子どもの扱いが上手で子どもから好かれる祖父母だった（18 歳），自分を何でも受け入れてくれた。父母に叱られた分，祖父母が優しくしてくれたので安心した（19 歳），（両親が）夫婦喧嘩をした時，叱られた時の逃げ場のようなところで一緒にいると安心するし，怒られたことも父母より心にはいったと思う（19歳），優しくて温かい雰囲気（19歳），甘やかすだけではだめだなということを学んだ（19 歳），子どもとしっかり向き合い，楽しさを共有することを教えてもらった（19 歳），母とは違う安心感がある（20 歳），家とは違った甘やかされ方で愛されていると感じた（20 歳）
祖父母との交流による質的側面（14 人）	小さかった頃の話を聞かせてくれた（18 歳），たくさん話した（18 歳），言葉遣い，礼儀を教えてもらった（18 歳），言葉使いを教えてくれた（19 歳），目上の人との接し方（19 歳），落ち着いた話し方，雰囲気を教えてもらった（20 歳）
祖父母による世話（7 人）	中学 2 年まで同居して身の回りのことや親のようにしてもらった（18 歳），体調管理をしてくれる（19 歳），祖父母と一緒に親戚の子のめんどうをみた（18 歳），お弁当を作ってくれた（19 歳），園の行事に来てくれた（20 歳），優しく妹の世話の仕方やお手伝いを教えてくれた（19 歳），母が入院した時に祖母がお弁当を作ってくれたり身の回りの世話をしてくれた（20 歳）

考　察

保育者養成課程に学ぶ学生を対象として，就学前までに祖父母から養育された体験及び，保育者養成校に進路を決める際に祖父母から受けた影響について尋ね，現在の祖父母との関係認知とどのような関連をもっているかについて検討した。その結果，ほぼ 6 割の学生が就学前までに祖父母から養育された体験を持っていることが示された。就学前に「祖父母に叱られた」経験は，現在の関係と有意な関連はみられなかったものの，就学前に祖父母と関わった経験，すなわち，「一緒に食事をした，世話をしてもらった，出かけた，遊んだ」ことが多いほど，現在の関係満足度に有意な関連をもつことが明らかになった。

現在の祖父母との関係の認識については，満足感という肯定的側面と負担感・忌避感という否定的側面の 3 因子で捉えられることがわかった。小川（1993）は孫と祖父母との関係はライフステージによって異なるとしているが，本研究では，就学前に受けた祖父母による被養育体験が，大学生になってからの関係満足度に関連し，影響することが示唆され，その一方で負担感や忌避感といった側面については，就学前の体験の多寡との間に有意な関連は見られなかった。すなわち，Matthews & Sprey （1985）が明らかにしたように，過去の良好な関わりは現在の肯定的側

面ともいえる関係満足度と関連するが，負担感や忌避感といった否定的側面との関連はなかった。調査対象が保育者養成課程で学ぶ学生であったことが影響している可能性もある。

子どもの保育・教育に携わるというキャリア志向を持つ対象であることから，祖父母との関係を現在は両価的に認知し，世代間のギャップや境界を感じてはいるが，祖父母との関係における葛藤を避けるように，学生が自分自身で調整していると捉えることもできよう。

本研究では，保育者養成課程で学ぶ学生と祖父母との関係の背景には，過去から現在にかけて相互に積み重ねてきた歴史があって，孫―親―祖父母という重層的関係（氏家 ,2011）が影響していることも示唆された。したがって，学生自身がこれまでの対人経験を振り返るような内容をとりいれ，豊かな生活体験を意識化することによって，「生活者」「ケアする者」「教育する者」としての保育者を養成することにつながると考えられる。

引用文献

藤尾淳子，古川雅文，浅川潔司，2010，幼稚園教員の資質能力に関する研究 ―― 幼稚園教諭，保護者，園長の力量観の比較から ――，学校教育学研究，22: 13-21.

福伊智，2016. 保育者養成カリキュラムの課題と展望，比治山大学短期大学部教職課程研究，Vol. 2: 90-97.

加藤邦子，2014，子育て期の親がひろば支援者との関係を築くための要因 ―― 栃木県の地域子育て支援施設における調査から，保育・教育・福祉研究，Vol. 12: 1-18.

厚生労働省，2013，保育を支える 保育士の確保に向けた総合的取組，retrieved 2019.9，file:///C:/Users/User/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/O3XL38LW/0000026218.pdf

厚生労働省，2018，平成 30 年雇用動向調査結果の概要，retrieved 2019.9. file:///C:/Users/User/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/QHZP5U48/kekka_gaiyo-02.pdf.

厚生労働省，2015, 保育士等に関する関係資料，第 3 回 保育士等確保対策検討会，retrieved 2019.09,C:/Users/User/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/RZ7V81ZX/s.1_3.pdf.

厚生労働省，2014,「保育人材確保のための『魅力ある職場づくり』に向けて」

Makino, K. 2016，Influence of Experience in Early Childhood Education and Care at School on Professional Careers, IFHE2016 XXⅢ.

Matthews, S. H., & Sprey, J., 1985, Adolescents' relationships with grandparents: an empirical contribution to conceptual clarification, Journal of Gerontology, 40（5）: 621-6.

文部科学省，2011，幼稚園教諭に求められる専門的職業能力の育成，retrieved 2-019.9, file:///C:/Users/User/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/7 UHXEYBI/1307545_3.pdf

中嶋律子・後藤宗理（2009）「青年期の親準備性 ―― 子育て経験者との比較 ――」名古屋市立大学看護学部紀要，Vol. 8: 9-14.

小川隆章，1993，孫と祖父母の関係に関する研究 , 応用心理学研究，No18: 13-24.

齋藤恵美・神村栄一・井上千恵子，2007, 教育実習におけるストレス反応とコーピング及び社会的スキルとの関連，新潟青陵大学大学院臨床心理学研究．Vol. 1: 47-52.

Shonkoff, J. P. & Phillips, D. A. ,2000, From neurons to neiborhoods: The science of early childhood development, Washington, DC: National Academy Press.

Strom, R. & Strom, S., 1993. The Grandparent Strengths and Needs Inventory. Chicago, IL: Scholatic Testing Service.

Strom, R., Strom, S. Pat Collinsworth, Saburo Sato, Katsuko Makino, Yasuyuki Sasaki, Hiroko Sasaki, & Norihiro Nishio, 1994, 日本の三世代研究からみた高齢者の学習，実技教育研究（鳴門教育大学），4: 49-61.

須永美紀，2010，保護者支援に求められる保護者と保育者の関係性，立教女学院短期大学紀要，42: 119-123.

氏家達夫，2011，『祖父母性と次世代の親子関係の支援』，氏家達夫・高濱裕子編著，「親子関係の生涯発達心理学」風間書房．110-130.

山脇真弓，2017，職場の人間関係が幼稚園教諭の就労意欲に及ぼす影響 —— 離職との関連について，名古屋柳城短期大学研究紀要，37: 165-182.

（提出日　2019 年 9 月 26 日）